

## 平成6年度日帰り人間ドックの成績

厚生連滑川総合検診センター

小川 忠邦, 川口 京子, 松井 規子,  
岸 宏栄, 大原 千津子, 川岸 智美,  
大重 美智留, 宮坂 純香, 川原 隆徳  
谷川 秀明

### はじめに

厚生連の日帰り人間ドックは、高岡、滑川両検診センターで分担して行なわれてきており、その中で農協職員の受診者が年々増加してきている。ところが高岡病院が、社会保険の検診機関としての指定を受けていないので検診は許可できないとの県からの指令があったため、県内すべての職員検診は滑川検診センターで実施しなければならないことになり、各農協別の分担の一部組み替えが行なわれ、地域的にみて不自然、非効率な受診分布となり、今後問題を残した。特に職員は40才台を中心に若年者が多く、成人病検診という本来の目的を離れて、職員検診的になったのは不本意と云わざるを得ない。

さて今年度は検診メニューの変更はなく、以下に平成6年度の成績を、従来と同じ方式<sup>1)</sup>に従って前年度と比較検討しながら記述する。二次検診の成績や最終診断についても、可能な限りそれぞれの項目の中で記載した。

### 成 績

#### (1) 受診状況

表1に年代別性別受診状況を示す。受診者総数は男2,856人、女3,226人、計6,082人で、前年度より678人、11.2%増加した。これは主として農協職員の増加に因るものである。男

女別では男47.0%、女53.0%とほぼ例年通りの傾向であったが、年代別では40才台と50才台が大幅に増加し、60才台が減少した。これは前述の職員検診の増加に因るものである。農協別では、入善町が2,045人で全体の33.6%を占め、ついで滑川市10.5%、富山市8.1%、黒部市7.1%、高岡市5.5%、魚津市4.9%、上市町4.3%、朝日町4.0%、宇奈月町3.2%、砺波市2.8%、小矢部市2.7%、婦中町2.1%などとなっている。このうち呉西地区はすべて職員検診である。

#### (2) 総合判定

表2に年代別性別総合判定結果を示す。異常なし、差支えなしと判定したものは男9.1%、女12.7%、平均11.0%で、前年度と比べると男性でやや減少したものの、大差はみられていない。

表1 年代別・性別受診状況

	男	女	計	%
～29才	51	23	74	1.2%
30～39才	300	221	521	8.6%
40～49才	1,054	1,251	2,305	37.9%
50～59才	735	957	1,692	27.8%
60～69才	588	706	1,294	21.3%
70才～	128	68	196	3.2%
計	2,856	3,226	6,082	
%	47.0%	53.0%		

### (3) 呼吸器

表3に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男11.7%、女5.1%、平均8.2%にみられ、前年度とほぼ同じであった。なお3年以内の再受診者の胸部X線写真については、前年度に引き続いて前回との比較読影を行なった。さてこの中で、呼吸器異常の大部分を占める胸部X線写真の異常内容についてみると、①肺癌が強く疑われた者は5名(いずれも男性)であったが、精査の結果は肉芽腫1(手術で確認)、Neurinoma1(手術で確認)、胸膜2、縦隔洞腫瘍1であった。②肺異常陰影は79名(男47、女32)、1.3%と前年度と全く同じであった。このうち要精査は31名(男18、女13)で、その結果は異常な

し14、陳旧性炎症4、肺結核1、プラ1、その他3、受診せず8となっており、肺癌は発見されなかった。要再検は48名で、その結果は異常なし22、陳旧性炎症8、肺気腫2、その他2、受診せず14となっている。③肺門影増大は25名(男11、女14)と前回の半数以下に減少した。これは比較読影によるものと、前回問題なしと確認されたものは除いたからである。このうち要精査は11名(男5、女6)で、その結果は受診しなかった1名以外はすべて異常なしであった。要再検は14名で、その結果は異常なし9、陳旧性肺結核1、受診せず4となっている。④肺門理増強は24名(男16、女8)で、このうち要精査の1名は受診せず、要再検は23名で、その結果は異常

表2 年代別・性別総合判定

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	10	1	24	32	49	91	15	50	8	14	1	0	107	3.7%	188	5.8%	295	4.9%
差支えなし	8	5	18	19	63	96	32	60	27	39	4	2	152	5.3%	221	6.9%	373	6.1%
要再検	0	1	3	1	5	13	1	14	6	7	2	0	17	0.6%	36	1.1%	53	0.9%
要経過観察	19	9	148	80	449	446	293	358	181	246	32	16	1,122	39.3%	1,155	35.8%	2,277	37.4%
要精密	11	6	80	56	314	384	189	248	176	176	36	16	806	28.2%	886	27.5%	1,692	27.8%
要治療	0	1	12	19	44	110	45	49	16	15	0	4	117	4.1%	198	6.1%	315	5.2%
治療中	3	0	15	14	130	111	160	178	174	209	53	30	535	18.7%	542	16.8%	1,077	17.7%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,225		6,082	
有所見者数	33	17	258	170	942	1,064	688	847	553	653	123	66	2,597	90.9%	2,817	87.3%	5,414	89.0%
%	64.7%	73.9%	86.0%	76.9%	89.4%	85.1%	93.6%	88.5%	94.0%	92.5%	96.1%	97.1%						
合計 %	50	67.6%	428	82.1%	2,006	87.0%	1,535	90.7%	1,206	93.2%	189	96.4%						

表3 呼吸器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	50	22	284	215	971	1,200	655	900	436	626	71	48	2,467	86.4%	3,011	93.4%	5,478	90.1%
差支えなし	0	0	1	2	7	8	7	9	25	23	15	7	55	1.9%	49	1.5%	104	1.7%
要再検	1	0	3	1	17	7	11	10	12	13	6	1	50	1.8%	32	1.0%	82	1.3%
要経過観察	0	1	10	0	47	26	52	30	82	32	28	11	219	7.7%	100	3.1%	319	5.2%
要精密	0	0	1	1	7	5	7	5	21	8	3	1	39	1.4%	20	0.6%	59	1.0%
要治療	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
治療中	0	0	1	1	5	5	3	3	12	4	5	0	26	0.9%	13	0.4%	39	0.6%
合計	51	23	300	220	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,225		6,081	
有所見者数	1	1	15	3	76	43	73	48	127	57	42	13	334	11.7%	165	5.1%	499	8.2%
%	2.0%	4.3%	5.0%	1.4%	7.2%	3.4%	9.9%	5.0%	21.6%	8.1%	32.8%	19.1%						
合計 %	2	2.7%	18	3.5%	119	5.2%	121	7.2%	184	14.2%	55	28.1%						

なし14, 受診せず9であった。以上肺腫瘍疑い, 肺異常陰影, 肺門影増大, 肺門理増強の四者を合計すると133名(男79, 女54)で, このうち要精査としたのは48名(男28, 女20)であったが, 肺癌は発見されなかった。

その他の呼吸器異常は, 換気機能異常313名(5.2%), 気管支喘息30名(殆ど治療中), 塵肺症22名, 間質性肺炎10名, 陳旧性肺結核6名, 肺気腫4名などがみられ, ほぼ例年並みであった。

一方喀痰細胞診は, 受診者259名(男246, 女13)中回収された検体は198名(回収率76.4%)で, 前年度の2/3に減少した。これは常用喫煙者(男53.5%, 女3.7%)の12.0%に過ぎず, 肺門部肺癌の早期発見の目的にはほど遠いのが現状である。成績は肺癌学会判定基準<sup>2)</sup>に従って, A判定(材料不足)10, B

判定(異常なし)188となり, C判定以上はみられなかった。

#### (4) 循環器

表4に示す通り, 異常なし, 差支えなしを除く異常所見者は男27.4%, 女25.1%, 平均26.2%とほぼ前年度並みであった。異常者の内訳では, 先ず高血圧は表5に示す通り, 男19.5%, 女18.3%, 平均18.9%で, 前年度よりやや減少した。これは若年受診者の増加によるものであろう。このうち一過性の高血圧と思われる要再検者を除くと16.6%となる。高血圧の中で治療中の者は43.3%(男43.1%, 女43.5%)で, 前年度の51.4%と比べるとかなり少なくなっている。これは60才以下の比較的若年の現役農協職員に, 治療を受けている者が少ないためである。これを年代別にみ

表4 循環器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	45	21	240	197	727	1,047	393	631	244	328	42	16	1,691	59.2%	2,240	69.4%	3,931	64.6%
差支えなし	5	1	32	11	135	38	103	59	88	59	19	7	382	13.4%	175	5.4%	557	9.2%
要再検	0	0	4	0	16	18	12	19	17	25	5	1	54	1.9%	63	2.0%	117	1.9%
要経過観察	1	1	14	9	114	89	126	138	102	153	26	22	383	13.4%	412	12.8%	795	13.1%
要精密	0	0	7	0	8	5	4	16	15	12	5	2	39	1.4%	35	1.1%	74	1.2%
要治療	0	0	0	2	3	3	2	1	3	1	0	0	8	0.3%	7	0.2%	15	0.2%
治療中	0	0	3	2	51	51	95	93	119	128	31	20	299	10.5%	294	9.1%	593	9.8%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,226		6,082	
有所見者数	1	1	28	13	192	166	239	267	256	319	67	45	783	27.4%	811	25.1%	1,594	26.2%
%	2.0%	4.3%	9.3%	5.9%	18.2%	13.3%	32.5%	27.9%	43.5%	45.2%	52.3%	66.2%						
合計%	2	2.7%	41	7.9%	258	15.5%	506	29.9%	575	44.4%	112	57.1%						

表5 高血圧

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0.0%	0	0.0%	1	0.0%
要再検	0	0	5	0	16	20	12	24	23	28	5	4	61	2.1%	76	2.4%	137	2.3%
要経過観察	0	1	10	4	73	53	91	83	61	96	13	15	248	8.7%	252	7.8%	500	8.2%
要精密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要治療	0	0	0	2	3	3	2	1	2	0	0	0	7	0.2%	6	0.2%	13	0.2%
治療中	0	0	3	2	43	44	82	86	93	110	19	15	240	8.4%	257	8.0%	497	8.2%
計	0	1	18	8	135	120	187	194	179	234	38	34	557	19.5%	591	18.3%	1,148	18.9%
%	0.0%	4.3%	6.0%	3.6%	12.8%	9.6%	25.4%	20.3%	30.4%	33.1%	29.7%	50.0%						
合計%	1	1.4%	26	5.0%	255	11.1%	381	22.5%	413	31.9%	72	36.7%						

ると、39才以下4.5%（男5.1%，女3.7%）、40才台11.1%（男12.8%，女9.6%）、50才台22.5%（男25.4%，女20.3%）、60才台31.9%（男30.4%，女33.1%）、70才以上36.7%（男29.7%，女50.0%）となり、前年度と比べると39才以下の若年者で増加、50才台の女性で減少、60才以上の女性で増加した。高血圧以外の循環器異常は表6に示す通りである。高血圧と関連の深い心肥大・心負荷は男15.7%、女5.6%、平均10.3%とほぼ前年度並みで、その他虚血性心疾患（疑）3.1%（男1.8%、女4.3%）、上室性並びに心室性期外収縮2.4%、右脚ブロック2.5%、心房細動0.5%、その他8.1%などが例年通りみられている。この中で心肥大、心負荷並びに虚血性心疾患は安静心電図による判定であり、疑陽性や病的意義の

乏しいものも多いと思われる。

#### （5）上部消化管

受診者は5,941名（97.7%）で、判定結果を表7に示す。異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男32.0%、女17.4%、平均24.2%とほぼ前年度並みであった。このうち要精査とした者は男16.1%、女10.6%、平均13.2%で、これもほぼ前年度並みであった。異常所見を部位別にみると食道0.6%、胃20.0%、十二指腸3.9%となる。

精検受診者は男64.7%、女86.1%、平均74.0%で、前年度と比べると男性で10%程度減少している。特に50才以下の若年受診者（主に農協職員）の低下が目立つ。精検結果は表8に示す通りである。発見胃癌は男6名、女4

表6 高血圧以外の循環器異常

	心 肥 大 心 負 荷		狭 心 症 虚 血 性 心 疾 患		心 房 細 動		期 外 収 縮		右 脚 ブ ロ ッ ク		そ の 他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	223	57	0	1	0	0	52	50	81	51	113	67
要 再 検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
要 経 過 観 察	198	106	21	103	7	0	17	12	11	6	98	117
要 精 密	19	9	3	12	7	1	4	1	0	0	15	19
要 治 療	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0
治 療 中	8	8	25	22	10	2	2	5	1	0	34	32
計	448	180	51	139	26	3	75	68	93	57	260	235
%	15.7%	5.6%	1.8%	4.3%	0.9%	0.1%	2.6%	2.1%	3.3%	1.8%	9.1%	7.3%
合 計 %	628	10.3%	190	3.1	29	0.5%	143	2.4%	150	2.5%	495	8.1%

表7 上部消化管

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	39	19	222	191	727	1,032	480	767	348	534	61	41	1,877	67.5%	2,584	81.8%	4,461	75.1%
差支えなし	0	0	1	0	1	6	5	10	7	9	1	0	15	0.5%	25	0.8%	40	0.7%
要 再 検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 経 過 観 察	0	0	27	7	135	80	96	52	95	51	23	5	376	13.5%	195	6.2%	571	9.6%
要 精 密	5	1	38	16	157	108	116	109	104	85	28	15	448	16.1%	334	10.6%	782	13.2%
要 治 療	0	0	2	0	4	1	4	1	2	0	0	0	12	0.4%	2	0.1%	14	0.2%
治 療 中	0	0	4	0	11	4	15	7	14	8	10	0	54	1.9%	19	0.6%	73	1.2%
合 計	44	20	294	214	1,035	1,231	716	946	570	687	123	61	2,782		3,159		5,941	
有所見者数	5	1	71	23	307	193	231	169	215	144	61	20	890	32.0%	650	17.4%	1,440	24.2%
%	11.4%	5.0%	24.1%	10.7%	29.7%	15.7%	32.3%	17.9%	37.7%	21.0%	49.6%	32.8%						
合 計 %	6	9.4%	94	18.5%	500	22.1%	400	24.1%	359	28.6%	81	44.0%						

名、計10名で、対受診者比は0.17%となり、前年度の0.19%よりさらに減少した。これは継続受診者が大半を占めているのと、若年受診者が多かったためである。進行度別では早期癌8名、進行癌2名であった。これらの発見経過をみると、初回受診者は2名で、他の8名はいずれも2回以上の受診歴があり、このうち進行癌であった2名についてみると、1名は10回目受診で、C領域・前壁にあり、BorrⅢ、深達度 pm、前年度は retrospective にみるとチェックミスであった。他の1名は4回目受診、A領域にあり BorrⅢ、深達度 se、スキルタイプで前年度は retrospective にみてもチェック不能であった。このような例が X線による早期発見の限界と考えられる。

#### (6) 便潜血反応

検査方法、判定基準は前年度と同じく、OCヘムディア・オート法で cut off 値150mg とし、同じく2日法(当日持参)で行なった。受検者は男93.1%、女95.2%、平均94.2%で、前年度と殆ど同じであった。このうち検便1回のみは6.1%(男4.9%、女7.2%)である。

便潜血1回陽性者は男4.2%、女2.9%、平均3.5%、2回陽性者は男0.6%、女0.2%、平均0.4%で、1回でも陽性を示した者は男4.8%、女3.1%、平均3.9%となり、前年度の4.1%よりやや減少した。便潜血陽性者の93.7%が要精検となり、そのうち精検受診者は男61.3%、女70.8%、平均65.4%で、前年度と比べると男性で増加、女性で減少した。この中から男性4名の大腸癌(直腸癌2名、S状結腸癌2名)が発見された。このうち直腸癌は2名共進行癌で、S状結腸癌は2名共早期癌であった。この4名は2回共検便を受けており、進行直腸癌の1名が2回共陽性、他の3名は1回のみ陽性であった。この成績から大腸癌発見率をみると、受検者の0.07%、便潜血陽性者の1.8%、精検受診者の2.9%に当り、便潜血陽性回数との関係をみると、2回陽性者の4.4%、1回陽性者の1.5%に癌が発見されたことになる。即ち陽性的中率は2.9%となり、検診効率は良好と云える。

#### (7) 肝 臓

表9に示す通り、異常なし、差支えなしを

表8 上部消化管 精検結果

	受診者数	要精検者数	精検受診者	精検受診率(%)	精 検 結 果 内 訳 (所見数)													
					胃癌	ATP	胃粘膜下腫瘍	胃潰瘍	胃潰瘍痕	胃ポリープ	十二指腸潰瘍	十二指腸憩室	十二指腸ポリープ	胃炎	その他	異常なし		
～29才	男	44	5	1	20.0%													1
	女	20	1		0.0%													
30～39才	男	294	40	24	60.0%			2	2	2	1		1			6		10
	女	214	16	16	100.0%					1	1	1				4		9
40～49才	男	1,035	161	91	56.5%			2	5	14	7	3				34	3	23
	女	1,231	109	83	76.1%	2		3	5	1	14	1	1			31		25
50～59才	男	716	120	77	64.2%	1	1	2	9	5	4	1				29	1	25
	女	946	110	97	88.2%			2	4	9	12					34	1	36
60～69才	男	570	107	83	77.6%	4			8	9	12	2				32	1	16
	女	687	85	79	92.9%	1		2	2	3	9					30	7	27
70才～	男	123	28	25	89.3%	1			1	3	3			1		8	4	4
	女	61	15	14	93.3%	1					1					9		3
計	男	2,782	461	301	65.3%	6	1	6	25	33	27	6	1	1	109	9	79	
	女	3,159	336	289	86.0%	4	0	7	11	14	37	2	1	0	108	8	100	
合 計		5,941	797	590	74.0%	10	1	13	36	47	64	8	2	1	217	17	179	

除く異常所見者は男43.8%，女24.1%，平均33.3%で、前年度と比べると男性で増加した。その内訳は表10に示す通りで、アルコールによる肝障害と思われる者は、アルコール性肝障害とした者と脂肪肝の一部で、ほぼ前年度並みであった。その他の肝障害は前年度よりやや少ない8.0%にみられた。

HCV抗体陽性者は147人、2.4%（男68人、2.4%、女79人、2.5%）でほぼ前年度と同じく、地域別で滑川市が7.8%（男7.0%、女8.4%）と突出して高いのはやはり前年度と同じ傾向であった。これらのうち何らかの肝機能異常を伴う者は147人中102人（69.4%）と高く、HCV抗体陽性者は潜在性に肝障害を有している者が多いことが示された。なおこれらのうち治療中の者は32.2%であった。HBs抗

原陽性者は2.4%で例年と変わらず、その殆どは肝機能異常を伴わないHBVキャリアである。

一方超音波によって肝のう胞9.7%、脂肪肝15.1%、肝血管腫または肝腫瘍疑4.1%などがチェックされた。このうち脂肪肝は前年度よりかなり増加したが、軽度のもは術者の主観に影響されるので評価はむづかしい。一方肝腫瘍疑で要精査とした者は38名（男23、女15）で、精査の結果は肝のう胞3名、肝血管腫12名、肝腫瘍疑1名、脂肪肝1名、異常なし11名、未受診10名で、肝癌は発見されていない。

### (8) 胆 嚢

表11に超音波によってチェックされた胆嚢

表9 肝 臓

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	34	22	159	168	506	874	351	588	319	392	71	41	1,440	50.4%	2,085	64.6%	3,525	58.0%
差支えなし	1	0	5	14	37	134	42	112	60	97	21	7	166	5.8%	364	11.3%	530	8.7%
要再検	0	0	5	1	8	13	6	29	16	28	1	4	36	1.3%	75	2.3%	111	1.8%
要経過観察	15	1	115	26	419	176	285	178	145	153	24	14	1,003	35.1%	548	17.0%	1,551	25.5%
要精密	1	0	13	11	53	48	30	35	30	27	9	2	136	4.8%	123	3.8%	259	4.3%
要治療	0	0	1	0	8	1	3	2	3	0	0	0	15	0.5%	3	0.1%	18	0.3%
治療中	0	0	2	1	23	5	18	13	15	9	2	0	60	2.1%	28	0.9%	88	1.4%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,226		6,082	
有所見者数	16	1	136	39	511	243	342	257	209	217	36	20	1,250	43.8%	777	24.1%	2,027	33.3%
%	31.4%	4.3%	45.3%	17.6%	48.5%	19.4%	46.5%	26.9%	35.5%	30.7%	28.1%	29.4%						
合計%	17	23.0%	175	33.6%	754	32.7%	599	35.4%	426	32.9%	56	28.6%						

表10 肝臓の異常

	アルコール性肝障害		C型肝炎		HBs抗原陽性		肝血管腫肝腫瘍		肝のう胞		脂肪肝		肝内結石		その他の肝障害	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	1	0	0	0	0	0	0	0	237	350	3	15	0	2	19	103
要再検	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	41	87
要経過観察	315	0	13	32	62	49	51	61	0	2	555	341	15	12	59	90
要精密	1	0	24	24	13	9	70	69	0	1	0	0	0	0	30	27
要治療	2	0	1	3	3	0	0	0	0	0	2	0	0	0	7	0
治療中	1	0	29	19	8	4	0	0	0	0	4	0	0	0	18	5
計	320	0	68	81	86	62	121	130	237	353	564	356	15	14	174	312
%	11.2%	0.0%	2.4%	2.5%	3.0%	1.9%	4.2%	4.0%	8.3%	10.9%	19.7%	11.0%	0.5%	0.4%	6.1%	9.7%
合計%	320	5.3%	149	2.4%	148	2.4%	251	4.1%	590	9.7%	920	15.1%	29	0.5%	486	8.0%

表11 胆嚢・膵臓の異常

	胆 石		胆のう炎		胆のうポリープ		胆のう腫瘍		胆管拡張		膵 炎		膵 腫 瘍	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
要 再 検	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	14	31	0	0
要 経 過 観 察	41	47	23	7	168	144	0	0	7	3	68	75	0	1
要 精 密	32	35	4	3	105	83	10	10	19	25	87	74	4	8
要 治 療	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
治 療 中	4	7	0	0	0	0	1	0	0	0	1	5	0	0
計	77	89	27	10	273	227	11	10	27	28	170	188	4	9
%	2.7%	2.8%	0.9%	0.3%	9.6%	7.0%	0.4%	0.3%	0.9%	0.9%	6.0%	5.8%	0.1%	0.3%
合 計 %	166	2.7%	37	0.6%	500	8.2%	21	0.3%	55	0.9%	358	5.9%	13	0.2%

の異常を示す。胆石は2.7%、胆嚢ポリープは8.2%で、前年度よりやや増加した。胆嚢腫瘍疑は20名（男10、女10）で、精査の結果、ポリープ9名、adenomyomatosis 3名、胆嚢壁肥厚2名、異常なし2名、未受診4名で、胆嚢癌は発見されなかった。

#### (9) 膵 臓

アマラーゼ測定と超音波検査によってチェックしており、それらの異常を表11に示す。アマラーゼ値は前年度と同じく血清で131単位以上（男2.4%、女0.1%）、尿で701単位以上（男3.5%、女3.3%）を異常とし、過去に精査を受けていない者に対して要精査または要再検とした。一方超音波による膵の描出は、その一部または全部が不能である場合が多く、膵癌の早期発見は困難と云わざるを得ない。その中で膵腫瘍疑とした者は13名（男4、女9）で、精査の結果は、総胆管拡張1名、脂肪沈着1名、異常なし8名、未受診3名となっており、膵癌は発見されていない。

#### (10) 腎・泌尿器

表12に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男8.4%、女5.7%、平均7.0%で、前年度と比べると男性でやや増加、女性でやや減少した。異常の内訳は表13に示す通りである。蛋白尿は0.9%（男1.2%、女0.6%）、血尿は7.1%（男2.8%、女11.0%）で、

いずれもほぼ前年度並みであった。

超音波による異常は、腎結石2.5%（男3.1%、女1.9%）、腎のう胞10.9%（男14.8%、女7.5%）、腎腫瘍疑0.7%など前年度並みであった。このうち腎腫瘍疑は41名（男29、女12）で、精査の結果、腎癌1名（男性）、腎のう胞7名、腎結石3名、angiomyolipoma 1名、重複腎盂2名、脂肪腫、萎縮腎、馬蹄腎、腎腫瘍疑各1名、異常なし16名、未受診7名であった。

#### (11) 血 液

表14に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男5.2%、女12.4%、平均9.0%で、男女共かなり増加した。このうち大部分を占める女性の貧血は、Hb 11.9g/dl以下は20.3%、Hb 11.5g/dl以下は12.5%となり、前年度より大幅に増加した。これを年代別にみると例年通り、49才以下17.5%、50才以上8.2%と圧倒的に若年者に多くみられており、いずれの年代層も前年度より増加している。このように貧血の大幅な増加は、若年受診者の増加と貧血そのものの増加とに因るものである。

その他では、白血球増加（9,000/mm<sup>3</sup>以上）6.3%、白血球減少（3,000/mm<sup>3</sup>以下）0.2%、血小板減少（13×10<sup>4</sup>/mm<sup>3</sup>未満）0.4%などがみられた。



(12) 甲状腺

医師の触診によって甲状腺腫大とされた者は、びまん性甲状腺腫が男2.2%、女15.8%、結節性甲状腺腫が男0.2%、女1.6%とほぼ前

年度並みであった。この中で結節性甲状腺腫で要精査とされた中から、甲状腺癌3名（いずれも女性）が発見された。

表12 腎・泌尿器

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	49	19	267	180	894	995	578	787	385	520	76	48	2,249	78.7%	2,549	79.0%	4,798	78.9%
差支えなし	1	4	11	32	73	192	95	119	143	129	44	16	367	12.9%	492	15.3%	859	14.1%
要再検	0	0	1	0	6	2	0	1	0	1	1	0	8	0.3%	4	0.1%	12	0.2%
要経過観察	0	0	17	8	62	48	51	41	39	42	5	3	174	6.1%	142	4.4%	316	5.2%
要精密	1	0	4	0	15	8	4	7	18	10	2	1	44	1.5%	26	0.8%	70	1.2%
要治療	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0.0%	0	0.0%	1	0.0%
治療中	0	0	0	1	4	5	6	2	3	4	0	0	13	0.5%	12	0.4%	25	0.4%
合計	51	23	300	221	1,054	1,250	735	957	588	706	128	68	2,856		3,225		6,081	
有所見者数	1	0	22	9	87	63	62	51	60	57	8	4	240	8.4%	184	5.7%	424	7.0%
%	2.0%	0.0%	7.3%	4.1%	8.3%	5.0%	8.4%	5.3%	10.2%	8.1%	6.3%	5.9%						
合計%	1	1.4%	31	6.0%	150	6.5%	113	6.7%	117	9.0%	12	6.1%						

表13 腎・泌尿器異常

	蛋白尿		血尿		尿路結石 腎結石		腎のう胞		腎腫瘍		腎・泌尿器 その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	2	2	4	310	0	0	418	237	0	0	0	0
要再検	2	0	7	2	0	0	0	0	0	0	1	2
要経過観察	25	13	66	40	84	59	1	2	0	0	6	37
要精密	4	2	0	0	1	0	4	2	29	12	7	10
要治療	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
治療中	1	1	2	2	4	1	0	0	0	0	6	8
計	34	18	79	354	89	60	423	241	29	12	21	57
%	1.2%	0.6%	2.8%	11.0%	3.1%	1.9%	14.8%	7.5%	1.0%	0.4%	0.7%	1.8%
合計%	52	0.9%	433	7.1%	149	2.5%	664	10.9%	41	0.7%	78	1.3%

表14 血液

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	46	23	260	184	864	988	626	851	508	652	108	59	2,412	84.5%	2,757	85.5%	5,169	85.0%
差支えなし	5	0	31	5	151	33	71	21	32	10	5	0	295	10.3%	69	2.1%	364	6.0%
要再検	0	0	3	0	4	4	3	2	0	3	1	1	11	0.4%	10	0.3%	21	0.3%
要経過観察	0	0	6	24	29	146	31	64	43	32	12	6	121	4.2%	272	8.4%	393	6.5%
要精密	0	0	0	1	2	1	3	1	3	2	1	0	9	0.3%	5	0.2%	14	0.2%
要治療	0	0	0	5	2	72	1	13	2	2	0	1	5	0.2%	93	2.9%	98	1.6%
治療中	0	0	0	2	2	7	0	5	0	5	1	1	3	0.1%	20	0.6%	23	0.4%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,226		6,082	
有所見者数	0	0	9	32	39	230	38	85	48	44	15	9	149	5.2%	400	12.4%	549	9.0%
%	0.0%	0.0%	3.0%	14.5%	3.7%	18.4%	5.2%	8.9%	8.2%	6.2%	11.7%	13.2%						
合計%	0	0.0%	41	7.9%	269	11.7%	123	7.3%	92	7.1%	24	12.2%						



### (13) 糖・代謝

表15に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見者は男19.4%、女9.6%、平均14.2%でほぼ前年度並みであった。その内訳は表16に示す通りである。先ず糖代謝異常のスクリーニングの手段は前年度に引き続いて空腹時血糖とHbA<sub>1c</sub>でありその成績を述べると、空腹時血糖111mg/dl以上は男13.4%、女6.6%、平均9.8%でほぼ前年度並み、HbA<sub>1c</sub> 5.8%以上は男8.6%、女4.4%、平均6.4%で、これは前年度よりやや増加した。次に空腹時血糖111mg/dl以上でかつHbA<sub>1c</sub> 5.8%以上つまり糖尿病の確率の高い者は、空腹時血糖111mg/dl以上の中の39.7% (男43.3%、女33.2%) で予想外に少なく、空腹時血糖111mg/dl以上の中には軽度の耐糖能異常もかなり含まれていると思われる。これに対して

HbA<sub>1c</sub> 5.8%以上でかつ空腹時血糖111mg/dl以上の者は、HbA<sub>1c</sub> 5.8%以上の中の61.0% (男67.2%、女50.4%) と比較的多く、HbA<sub>1c</sub> 5.8%以上では、胃切除以外は糖代謝異常を伴っている場合がかなり多いことを示している。一方HbA<sub>1c</sub> 5.8%以上でかつ空腹時血糖111mg/dl以下の者つまりHbA<sub>1c</sub>をスクリーニング基準とした場合の疑陽性と思われる者は39.2% (男32.8%、女50.4%) で、そのうち胃切除を受けた者は13.1%と意外に少なかった。以上の成績を参考にし、前回までの成績や肥満、家族歴などのrisk factorなどを考慮して精査、経過観察などの指示を与えた。

一方高尿酸血症は7.1mg/dl以上とすると男10.5%、女0.5%となるが、男女差を考慮して前年度と同じく男性では7.7mg/dl以上、女性では6.1mg/dl以上を異常としたところ、男

表15 糖・代謝

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	45	22	255	209	826	1,140	562	833	465	603	107	60	2,260	79.1%	2,867	88.9%	5,127	84.3%
差支えなし	0	0	0	4	20	18	11	14	9	10	3	2	43	1.5%	48	1.5%	91	1.5%
要再検	0	0	1	0	1	4	1	1	1	0	0	0	4	0.1%	5	0.2%	9	0.1%
要経過観察	4	1	31	5	107	52	66	65	49	54	8	3	265	9.3%	180	5.6%	445	7.3%
要精密	1	0	6	1	43	25	34	20	18	18	0	0	102	3.6%	64	2.0%	166	2.7%
要治療	0	0	4	1	19	5	31	7	6	4	0	1	60	2.1%	18	0.6%	78	1.3%
治療中	1	0	3	1	38	7	30	17	40	17	10	2	122	4.3%	44	1.4%	166	2.7%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,226		6,082	
有所見者数	6	1	45	8	208	93	162	110	114	93	18	6	553	19.4%	311	9.6%	864	14.2%
%	11.8%	4.3%	15.0%	3.6%	19.7%	7.4%	22.0%	11.5%	19.4%	13.2%	14.1%	8.8%						
合計%	7	9.5%	53	10.2%	301	13.1%	272	16.1%	207	16.0%	24	12.2%						

表16 糖・代謝異常

	糖尿病		高血糖		耐糖能障害		高尿酸血症		高r-gl血症		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
差支えなし	0	0	30	31	0	1	0	0	12	18	6	1
要再検	0	0	1	3	0	0	2	1	0	1	1	0
要経過観察	24	14	100	55	32	33	119	62	7	32	4	1
要精密	52	21	44	27	9	11	0	0	0	5	0	0
要治療	54	18	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0
治療中	90	40	0	0	1	1	32	1	0	2	0	0
計	220	93	175	116	42	46	159	64	19	58	11	2
%	7.7%	2.9%	6.1%	3.6%	1.5%	1.4%	5.6%	2.0%	0.7%	1.8%	0.4%	0.1%
合計%	313	5.1%	291	4.8%	88	1.4%	223	3.7%	77	1.3%	13	0.2%

4.8%, 女2.1%, 平均3.4%が高尿酸血症と判定され, 前年度と比べると男性で減少, 女性で増加した。

#### (14) 血清脂質

表17に血清脂質の成績を示す。総コレステロール, 中性脂肪, HDLコレステロールのいずれかが異常を示した者は男45.2%, 女33.8%, 平均39.1%で, これを前年度と比べると男性は不変, 女性でかなり減少した。これを年代別にみると, 男性では39才以下46.2%, 40才台50.9%, 50才台44.6%, 60才以上36.7%と40才台をピークにほぼ全年代に平均してみられるのに対し, 女性では39才以下13.9%, 40才台23.3%, 50才台42.5%, 60才台46.1%と年代上昇と共に増加し, 50才以降急増しているのが特徴で, これは後述するように, 中

年男性に多い高中性脂肪血症と高年女性に多い高いコレステロール血症に因るものである。従って今年度女性で減少したのは若年受診者の増加によるものであって, 女性の高脂血症そのものが減少したからではない。

次にこれを各脂質別にみると, コレステロールのみ高値は表18に示すように男9.3%, 女21.1%, 平均15.6%にみられ, 中性脂肪のみ高値は表19に示すように男21.4%, 女4.8%, 平均12.6%で, 両者共高値は表20に示す通り男8.6%, 女5.2%, 平均6.8%にみられた。結局高コレステロール血症は男17.9%, 女26.3%, 平均22.4%, 高中性脂肪血症は男30.0%, 女10.0%, 平均19.4%にみられた。一方低HDLコレステロール血症は表21に示すように男17.9%, 女6.5%, 平均11.9%であった。以上脂質異常を前年度と比べると, 高コレステ

表17 血清脂質

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	35	21	147	188	503	948	398	543	353	379	90	34	1,526	53.4%	2,113	65.5%	3,639	59.8%
差支えなし	1	0	6	1	14	11	9	7	8	3	2	1	40	1.4%	23	0.7%	63	1.0%
要再検	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要経過観察	15	2	141	31	506	279	309	352	217	288	34	24	1,222	42.8%	976	30.3%	2,198	36.1%
要精密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要治療	0	0	5	1	17	6	8	15	1	5	0	0	31	1.1%	27	0.8%	58	1.0%
治療中	0	0	1	0	14	5	11	40	9	31	2	9	37	1.3%	86	2.7%	123	2.0%
合計	51	23	300	221	1,054	1,251	735	957	588	706	128	68	2,856		3,226		6,082	
有所見者数	15	2	147	32	537	292	328	407	227	324	36	33	1,290	45.2%	1,090	33.8%	2,380	39.1%
%	29.4%	8.7%	49.0%	14.5%	50.9%	23.3%	44.6%	42.5%	38.6%	45.9%	28.1%	48.5%						
合計%	17	23.0%	179	34.4%	829	36.0%	735	43.4%	551	42.6%	69	35.2%						

表18 高コレステロール血症単独

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	0	0	1	0	0	6	0	1	0	1	2	0	3	0.1%	8	0.2%	11	0.2%
要再検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	2	1	23	19	97	180	60	228	63	171	7	15	252	8.8%	614	19.0%	866	14.2%
要精密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要治療	0	0	0	0	0	3	1	8	0	3	0	0	1	0.0%	14	0.4%	15	0.2%
治療中	0	0	0	0	4	5	3	22	3	13	0	4	10	0.4%	44	1.4%	54	0.9%
計	2	1	24	19	101	194	64	259	66	188	9	19	266	9.3%	680	21.1%	946	15.6%
%	3.9%	4.3%	8.0%	8.6%	9.6%	15.5%	8.7%	27.1%	11.2%	26.6%	7.0%	27.0%						
合計%	3	4.1%	43	8.3%	295	12.8%	323	19.1%	254	19.6%	28	14.3%						

ロールは男女共減少し、高中性脂肪は男性で増加、女性でわずかに減少したが、これは若年受診者の増加に因るもので、基本的には変わっていないと思われる。なお低HDLコレステロール血症は殆ど不変であった。

### (15) 肥 満

前年度と同じく明治生命の標準体重表<sup>3)</sup>と

の比率で肥満度を表わした。その成績は表22に示す通りである。標準体重比+11%以上の肥満者は男34.7%、女28.1%、平均31.2%と前年度より男女共大幅に増加した。特に男性の増加が著しい。これは肥満の多い50才台以下の受診者の増加も一因であろう。これを年代別にみると、男性では39才以下33.9%、40才台37.9%、50才台38.6%、60才以上26.3%

表19 高中性脂肪血症単独

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	1	0	5	1	20	6	13	6	10	2	0	1	49	1.7%	16	0.5%	65	1.1%
要 再 検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0.0%	1	0.0%	1	0.0%
要経過観察	6	0	73	4	247	34	133	48	73	39	11	3	543	19.0%	128	4.0%	671	11.0%
要 精 密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 治 療	0	0	2	1	3	1	5	0	0	1	0	0	10	0.4%	3	0.1%	13	0.2%
治 療 中	0	0	1	0	3	0	2	1	2	3	1	2	9	0.3%	6	0.2%	15	0.2%
計	7	0	81	6	273	41	153	55	85	46	12	6	611	21.4%	154	4.8%	765	12.6%
%	13.7%	0.0%	27.0%	2.7%	25.9%	3.3%	20.8%	5.7%	14.5%	6.5%	9.4%	8.8%						
合 計 %	7	9.5%	87	16.7%	314	13.6%	208	12.3%	131	10.1%	18	9.2%						

表20 高コレステロール血症+高中性脂肪血症

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 再 検	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.0%	1	0.0%	2	0.0%
要経過観察	2	0	27	4	95	16	56	50	23	47	3	4	206	7.2%	121	3.8%	327	5.4%
要 精 密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 治 療	0	0	3	0	14	2	3	7	1	1	0	0	21	0.7%	10	0.3%	31	0.5%
治 療 中	0	0	0	0	7	1	6	17	4	15	1	3	18	0.6%	36	1.1%	54	0.9%
計	2	0	31	4	116	20	65	74	28	63	4	7	246	8.6%	168	5.2%	414	6.8%
%	3.9%	0.0%	10.3%	1.8%	11.0%	1.6%	8.8%	7.7%	4.8%	8.9%	3.1%	10.3%						
合 計 %	2	2.7%	35	6.7%	136	5.9%	139	8.2%	91	7.0%	11	5.6%						

表21 低HDLコレステロール血症

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
差支えなし	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	1	0.0%	1	0.0%	2	0.0%
要 再 検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	3	1	51	4	204	74	139	63	93	62	21	6	511	17.9%	210	6.5%	721	11.9%
要 精 密	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要 治 療	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
治 療 中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計	3	1	51	4	204	74	139	64	94	62	21	6	512	17.9%	211	6.5%	723	11.9%
%	5.9%	4.3%	17.0%	1.8%	19.4%	5.9%	18.9%	6.7%	16.0%	8.8%	16.4%	8.8%						
合 計 %	4	5.4%	55	10.6%	278	12.1%	203	12.0%	156	12.1%	27	13.8%						

と50才台まではほぼ平均してみられるが、60才以上でかなり減少するのに対し、女性では39才以下14.8%、40才台24.5%、50才台32.8%、60才以上32.3%と高齢になる程増加している。一方標準体重比-11%以下の“やせ”は男9.7%、女12.5%、平均11.2%と男女共に男性で大幅に減少した。これはやせの少ない若年男性受診者の増加によるものであろう。

### (16) 眼 底

表23に示す通り、異常なし、差支えなしを除く異常所見は男23.0%、女19.2%、平均21.0%と前年度とはほぼ同じであった。これは判定医の交代がなかったことにも因ると思われる。主なものとして高血圧性眼底4.4%、動脈硬化性眼底9.6%、乳頭陥凹5.0%、乳頭コーヌス3.3%、網脈絡膜の異常では白斑4.8%、萎縮3.7%、出血1.6%などで、また糖尿病性網膜症は29名(0.48%)であった。

### (17) 乳 腺

従来通り外科医による触診と超音波断層撮影との併用で実施した。表24に示す通り11.9%に異常がみられ、前年度より大幅に増加した。異常者は若年者に圧倒的に多く、今回の増加はそのためと思われる。その内訳は乳腺症(疑)9.3%、良性乳腺腫瘍(疑)3.2%などで、乳癌は発見されていない。

### (18) 婦 人 科

前年度と同様に、内診、子宮頸部細胞診及び経膈卵巣エコーを行なった。3,045名(94.4%)が受検し、その成績を表25に示す。10.7%に異常所見がみられ、前年度よりやや増加した。その内訳は表26に示す通りである。子宮筋腫5.8%、炎症2.3%、頸管ポリープ0.9%、卵巣腫瘍疑1.2%などで、このうち子宮筋腫は前年度の約2倍に増加した。これは同じ医師によるものなので判定の違いではなく、若年

表22 年代別肥満度

標準体重比	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
-21%以下	2	6	4	6	10	15	1	15	7	12	6	0	30	1.1%	54	1.7%	84	1.4%
-11～-20%	10	11	20	42	66	150	60	76	70	64	19	7	245	8.6%	350	10.8%	595	9.8%
-10～+10%	25	4	171	139	579	779	390	552	349	394	77	47	1,591	55.7%	1,915	59.4%	3,506	57.6%
11～20%	7	1	60	18	266	181	200	202	115	153	20	9	668	23.4%	564	17.5%	1,232	20.3%
21～30%	2	1	31	9	104	76	68	79	37	67	5	3	247	8.6%	235	7.3%	482	7.9%
31%以上	5	0	14	7	29	50	16	33	10	16	1	2	75	2.6%	108	3.3%	183	3.0%

表23 眼 底

	～29才		30～39才		40～49才		50～59才		60～69才		70才～		合 計					
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	%	女	%	計	%
異常なし	46	23	258	189	815	1,049	445	701	262	322	42	17	1,868	66.2%	2,301	72.2%	4,169	69.4%
差支えなし	1	0	13	10	86	67	90	79	91	106	23	12	304	10.8%	274	8.6%	578	9.6%
要再検	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
要経過観察	1	0	21	18	106	109	148	133	180	193	48	17	504	17.9%	470	14.8%	974	16.2%
要精密	2	0	7	3	25	12	32	21	29	49	8	8	103	3.7%	93	2.9%	196	3.3%
要治療	0	0	0	0	3	3	5	3	5	1	0	2	13	0.5%	9	0.3%	22	0.4%
治療中	1	0	0	1	7	6	8	7	9	21	4	3	29	1.0%	38	1.2%	67	1.1%
合計	51	23	299	221	1,042	1,246	728	944	576	692	125	59	2,821		3,185		6,006	
有所見者数	4	0	28	22	141	130	193	164	223	264	60	30	649	23.0%	610	19.2%	1,259	21.0%
%	7.8%	0.0%	9.4%	10.0%	13.5%	10.4%	26.5%	17.4%	38.7%	38.2%	48.0%	50.8%						
合計%	4	5.4%	50	9.6%	271	11.8%	357	21.4%	487	38.4%	90	48.9%						

受診者の増加に因るものかもしれない。

子宮頸部細胞診 classⅢ以上は16名みられ、このうち classⅤは2名でいずれも子宮癌、classⅢbは3名でこのうち2名は子宮癌、1名は精検未受診となっている。classⅢaは11名で、精検の結果Ⅰ～Ⅱが7名、Ⅲaが1名、未受診3名となっている。以上4名の子宮癌が発見され、いずれも上皮内癌であった。一方卵巣腫瘍疑とした中から、癌性腹膜炎が1

名発見されている。

#### (19) 視力・聴力

全員測定しているが判定は行っていない。

#### (20) その他

例年通り皮膚病、頸部リンパ節腫大などが若干みられたのみであった。

表24 乳房

	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし	13	189	1,035	867	667	66	2,837	88.1%
差支えなし	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
要再検	0	1	27	8	4	0	40	1.2%
要経過観察	4	20	113	47	17	1	202	6.3%
要精密	1	11	76	34	18	1	141	4.4%
要治療	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
治療中	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
合計	18	221	1,251	956	706	68	3,220	
有所見者数	5	32	216	89	39	2	383	
%	27.8%	14.5%	17.3%	9.3%	5.5%	2.9%	11.9%	

表25 婦人科

	～29才	30～39才	40～49才	50～59才	60～69才	70才～	計	%
異常なし	6	178	932	865	666	63	2,710	89.0%
差支えなし	0	1	7	1	0	0	9	0.3%
要再検	0	0	0	0	0	0	0	0.0%
要経過観察	0	2	19	6	0	0	27	0.9%
要精密	0	8	138	45	24	0	215	7.1%
要治療	1	11	37	15	5	1	70	2.3%
治療中	0	2	9	3	0	0	14	0.5%
合計	7	202	1,142	935	695	64	3,045	
有所見者数	1	23	203	69	29	1	326	
%	14.3%	11.4%	17.8%	7.4%	4.2%	1.6%	10.7%	

表26 婦人科異常

	膣炎	頸管ポリープ	子宮筋腫	卵巣腫瘍	細胞診クラス3以上	その他
差支えなし	0	0	8	0	0	2
要再検	0	0	0	0	0	0
要経過観察	0	1	25	1	0	1
要精密	1	26	134	35	15	18
要治療	68	0	1	0	0	1
治療中	1	0	10	1	0	3
計	70	27	178	37	15	25
%	2.3%	0.9%	5.8%	1.2%	0.5%	0.8%

## ま と め

(1) 平成6年度の滑川検診センター人間ドック受診者は6,082人で前年度より11.2%増加し、検診センター発足以来最も多い人数を記録した。その増加の殆どは、高岡検診センターで実施できない農協職員で占めている。

(2) 上述のように40~50才台中心の農協職員検診の大幅な増加によって全体の成績は、これまでの50~60才台中心の農協組合員とはかなり異なった傾向がみられた。農協職員は二次検診受診率が低く、成績の評価や精度管理などにおおきな影響を及ぼすことは必至で、そのほか不都合な点も多く、このような職員検診に偏った受診者構成は問題が大きく、早急に根本的解決を望みたい。

(3) 癌は胃癌10名、大腸癌4名、腎癌1名、甲状腺癌3名、子宮癌4名、癌性腹膜炎1名の計23名発見された。

(4) 発見胃癌は10名と前年度と同数であったが、対受診者比は0.17%とさらに減少した。これは継続受診者が大半を占めているのと若年受診者が多かったためである。10名中進行癌は2名でいずれも逐年受診者であるが、うち1名はスキルス型、seの癌で前年度チェック不能例であり、X線による早期発見の限界を感じさせられるケースである。このような例は毎年経験されており、内視鏡検診の導入の必要性を痛感させられる。

(5) 腹部超音波検診によって発見された癌は腎癌1名のみで、過去7年間の総計でも発見癌は6名(肝癌1、転移性肝癌1、胆嚢癌1、腎癌3)で延べ対受診比は0.028%と非常に少なく、労力の割に非効率と云わざるを得ない。その理由として考えられるのは、肝癌のhigh riskである肝硬変の受診者は皆無に近く、胆嚢癌も発生率は低く、膵癌も膵自体の描出困難例が多くて早期発見は期待できず、結局腎癌発見が期待されるに過ぎないからで

あろう。今後も術者のレベルアップによって高い精度の維持に努める一方で、効率よくスクリーニングするために対象者の選定や検診方法等を根本的に考え直す必要があると思われる。

(6) 女性の貧血がかなり増加している。その原因の殆どは不適切な食習慣にあると思われるので、強力な生活指導が必要である。

(7) 肥満者の増加が著しい。男女共増加しているが特に男性が目立つ。元々若中年男性において肥満者が多いが、年々その傾向が著しくなっている。豊富な食生活、飲酒習慣それに車社会に代表される運動不足など現代のライフスタイルが大きく寄与しているものと思われる。いずれにしても高脂血症、糖尿病などに直結するrisk factorであり、成人病予備軍として重視されなければならない。

(8) 二次検診の状況をまとめると、要二次検診は男1,247人(43.7%)、1,688件、女1,482人(46.0%)、2,026件、合計2,729人(44.9%)、3,714件で、そのうち受検したのは男763人(61.2%)、999件(59.2%)、女1,148人(77.5%)、1,530件(75.5%)合計1,911人(70.0%)、2,529件(68.1%)であった。これを前年度と比べると男女共5%程度減少している。これは農協職員の二次検診受診率の低下に因るものと思われる。結果は、異常なし・差支えなし44.4%、経過観察37.1%、要治療16.6%、その他1.9%で、例年とほぼ同じ傾向であった。

## 文 献

- 1) 小川忠邦ほか：平成5年度日帰り人間ドックの成績、富農医誌、26：9~23、1995。
- 2) 集団検診における喀痰細胞診の判定基準と指導区分(1992改訂)：肺癌、32：157、1992。
- 3) 塚本 宏ほか：死亡率からみた日本人の体格、厚生生の指標、33：3、1986。